〔一〕

次の一線のカタカナを漢字になおしなさい。

「とめ・はね・はらい・文字のバランス」に気をつけて、ていねいに書きなさい。

1 キジュツ式の問題を解く。
2 サイバン所の見学に行った。
3 台風がキュウソクに発達する。
4 総理ダイジンに任命される。
5 植木にシチュウを立てる。
6 タテブエを使って演奏する。
7 ガイトウで募金活動をする。
8 遠足でフクハンチョウになる。
9 ユウキを出して立候補する。
10 会員としてトウロクする。

〔二〕

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

きみは夢中になって打ちこんでいることがありますか？

中高校生というのは、(1)「好きなこと」と「やらなければいけないこと＝勉強」の狭間で苦しむことが多い時期。

ぼくもまさにそうでした。中学生のとき、ぼくはテニスをやっていました。ふだんは部活中心の生活で、中間テストや期末テストの2週間ぐらい前からあわてて勉強モードに切り替えて、なんとか試験を乗り越えていたわけです。好きな運動から離れ、受験勉強に集中しなければならなくなったとき、エネルギーをどこに向けていいのかわからなくなって、人生初のノイローゼみたいな感じになりました。勉強しなければいけないのはわかっているんですが、身体を動かして発散することをしなくなったので、うんざりしてしまう。友だちとの「しゃべくり勉強法」は、ぼくにとって、覚えたことの確認というだけでなく、話して発散する、という効果もありました。そんなことで、なんとかがんばって高校受験を乗りきりました。

高校に入ったら、身体を動かしたくてたまらずに、またテニス部に入部です。そしてふだんはテニスざんまい、試験が近づくと勉強モードに入る。中学時代と同じような感じでしたが、大学受験は高校受験ほど甘くはなかった。高3の年は受験に失敗し、浪人することになりました。1年間、受験のための勉強に明け暮れないといけない。あのときは本当

にしんどかったです。

よく「好きなことだけやって生きていけるか？」などと言いますね。それができるならそれに越したことはありませんが、「好きではないこともやるから、好きなことがいっそう楽しくなる」と考えることもできます。

好きではないことに集中するためには、好きなことに熱中した経験があるほうがいいです。何かに没頭した快感を味わっているからこそ、好きではないけれどやらなきゃいけないことにも一生懸命になれる。「好きなこと」や「やりたいこと」には、人生を幸せにしていくためのヒントが詰まっています。

好きなことに熱中していると、時間がたつのも忘れます。「いくらでもやっていられる」「もっともっとやっていたい」と思う。楽しいですよね。自分の好きなことに没頭するのは、幸せな時間です。

ところが、「そんなふうに何かに熱中したことがない」「夢中になるほど好きなことなんかない」と言う人がいます。

「趣味や特技は？」

「とくにないです」

「好きな作家やミュージシャン、(a)＿＿＿＿ひいきのスポーツチームとかはあるんじゃない？」

「とくにないです」

「やりだしたら楽しくてやめられない、みたいなことはないの？」

「なかなかやめられない感じのことはありますけど、楽しくてたまらないみたいな感じはないです」

もし面接試験でもこんなふうに答えていたら、その人はまず受かりません。大学入試でも就職活動でも、(2)こんな感じの人を「採りたい」とは思ってくれませんから。

こういう人は、何かに熱中したことがないというより、思う存分何かに打ちこんだことが、「成功体験」として自分のなかに残っていないんです。

何かに熱中するというのは、自然にハマってしまう感じのようですが、その人の「生きていく構え」が関係しています。

目の前のことに対して、自分の心を動かそうとしていない人は、すべてが冷めた感じ、単調な感じになっている。それは、夢中になったときの快感というものをしっかり味わっていないのです。

初めから直感的に「これが好き！」と思ってやることもありますが、たいていのことは、好きだから熱中するというより、やっていたらおもしろくなって、夢中になって、好きになっていく、というパターン。

［　A　］、体育の時間のマラソン、部活のトレーニングでのランニングがありますね。最初から「走るの大好き」と思っている人はあまりいないでしょう。でも、走りはじめる。ランニングをしていると、途中までけっこう苦しかったのが、あるところからスーッと楽になる状態に入ります。身体が軽くなり、苦しさを感じなくなる。気分は高まってい

るけれど、心はおだやか。なんだかこのままずっと走りつづけられるような感じになります。これを「ゾーン」と呼びます。「没頭感覚」ですね。

ランニングに限らず、あることを続けていると、脳のなかで快感物質が出て、そういう状態に入りやすくなるのです。こういう快感を味わった人は、走るのが苦にならなくなります。むしろ楽しい。走り終わったあとに、爽快感、充実感がわきます。翌日もゾーンに入り、伸ばした距離もクリアできると、さらに充実感があり、達成の喜びがある。自信もついてきます。［　B　］、もっとやりたくなる。どんどん楽しくなってくる。

何かを好きになる、ハマるというのは、こんな循環で「もっとやりたい」という気分になり、「やらずにいられなくなっていく」んですね。自分のなかに、没頭感覚による快感があるから、成功の回路ができるんです。没頭感覚やこの快感の回路を味わっていない人は、「ランニングなんて、疲れるばっかり」「どこが楽しいの？」というところで止まっているんです。

だれでもみんな、小さいころには何かに夢中になったことがあるはずです。砂遊びが好きで、砂山を作ったりトンネルを掘ったり、壊してはまた作るということをずっとやっていられたとか。何かのマネをする「ごっこ」遊びにハマったとか。子どもは、何かしら熱中するものをもっています。

自分が興味をもったものに夢中になることが、充実感や自信のタネになっていると、その後も好きなことに積極的にチャレンジしていけるんです。

［　C　］、夢中になった先にある楽しさや達成感などの心地よさを味わう経験につながっていないと、没頭感覚が閉じていってしまうのです。

夢中になれたものが、勉強に関係することや、スポーツや習いごとのようなものだと、親から応援してもらえますが、「くだらないこと」「危険なこと」と見なされると、制止されてしまいます。

「いつまでそんなことやってるの？　いいかげんにしなさい」

「危ないからやっちゃダメって言ったでしょ」

「○○ばかりやっていて……。宿題はやったの？」

などと言われて、自分が興味をもったことが親から評価してもらえることではない場合、いい回路になっていないわけです。そのうちに、自分で自分にブレーキをかけて、何かをおもしろがる気持ちが消極的になっていってしまう。

好奇心をもっていない人間はいません。没頭感覚をもっていない人もいないんです。何かに熱中したことがない、没頭するほど打ちこんだことがない人は、自分のなかで何かに没頭することの快感の回路を眠らせてしまっているのだと思います。(3)没頭することの「幸せ」に気づけていないんです。中学生、高校生のうちに、その回路を自分のなかで目覚めさせておきましょう。そうすると、躍動感のある人になります。ものご

とを積極的に楽しんでいく構えができるんです。

没頭感覚というものを意識しているのといないのとでは、一生が大きく変わってきます。小学生のころからずっとダンスに打ちこんできた。プロになれたらいいなと思っていたけれど、それはとても無理だという現実がわかってきた。「将来そっちに進めないんだったら、どんなに熱中しても意味がない」と思ってしまうこともあります。それで終わりなんかじゃないんです。何年間か夢中になって打ちこんできたこと、熱中してきたことが、(4)没頭体験としてこれから先の自分の生き方にあらわれます。なぜなら、「好きになり方」を知っているから。「情熱」をどうやって注いでいったらいいかを知っているから。そこにある充実感、幸せな感じを知っているから。

没頭感覚を体感してきている人は、たとえ何かに失敗したり行き詰まったりしても、ほかのことにまた熱心に取り組むことができて、そこでもまた充実した時間を過ごすことができるのです。だから、とにかく好きなことに熱くなれるということが大事。好奇心、探求心のわくことを、「掘っていく」気持ちでやってみることです。それが将来の仕事にできるかどうかは、また別問題です。

自分が「これをやっているときがいちばん自分らしいと思える」と思うことと、仕事としてうまくやっていけることとは違います。夢中になれることと、得意なことは(b)微妙に違う。自分が得意でも、もっともっとうまくできる人がいたら、太刀打ちできない。プロとしてやっていくのはむずかしい。夢中になれることを仕事にすることが幸せな場合もありますし、仕事は仕事として別のことをやり、趣味としてやるほうが幸せな場合もあります。

でも、夢中になれる力は、これから先いろいろなところに向けていけるんです。自分の新たな可能性はどんなところにあるのか。それを知るためには、「好きなこと」をどんどん増やしていったほうがいい。いろいろなところに興味を広げていったほうがいいのです。好きなことを増やしていくには、好奇心を全開にして、「ちょっとおもしろそう」と思ったことにはどんどんチャレンジしてみることです。

ほかの人が「いい」とか「おもしろい」と言っているものは、基本的にすべて「いいね！」のスタンスで受け入れるんです。「そのミュージシャン知らなかった。聴いてみるね」と前向きにとらえる。［　　］ことが大事です。自分がいままで聴いていないものこそ、「どんなものなんだろう？」「これにはどんなよさがあるんだろう？」と興味をもつ。知らなかったところに、何か自分の興味をパーンと開いてくれるようなものがあることもあります。そういう出合いのきっかけを作ってもらえた、自分が出合う機会のなかったものを教えてもらえたわけだから、ありがたいことなんです。ひとつのものしか知らなくて、「これだけがいい」と思いこんでいるのは、世界が狭い。食べ物でいえば偏食です。いろいろなものを食べてみることで、いろいろなおいしさがあることもわかるし、そんななかでも自分は「とくにこれが好きだなあ」というものがわ

かってくる。それは、いろいろなものを知っているからこその深みです。「これだけ」とひとつのものしか食べていない人の知っている世界とは奥行きが違います。

知らないことを教えてもらったときこそ、おもしろいんです。

新しいものに出合って、これとこれがつながっていたと気づき、またそれが別のものともつながって、遠いところのあれやこれともつながっていく。脳のなかで無限にシナプスがつながり合っていくと、いろいろな人と出会うういしさのような、「つながる快感」のようなものが脳のなかに生まれます。好きなもののつながりが、さらなる幸せを呼ぶ。「あれもいい」「これもいい」と感じるものが蓄積され、自分のなかに好きなものがどんどん増えていくと、心がどんどん豊かになっていきます。

その心の豊かさこそが「教養」というものだとぼくは思っています。高尚な知識をもっていること、むずかしいことを知っているだけが教養ではないんです。

マンガも、流行りの音楽も、食べ物の味わいがわかることも、文化であり教養です。本を読む、音楽を聴く、美術作品を観る、映画を観る、いろいろな方向に自分を開いて、たくさん読んだり聴いたり観たりする。「もっと読みたい」「もっと聴きたい」「もっと観たい」ということで関心を広げていると、知識もついてくるし、見る眼、聴く耳も育ってくる。自分に「もっと知りたい」「もっとくわしくなりたい」という気持ちを起こさせてくれるものを、つねに追い求める。その世界に潜りこんでいく感覚を大事にする。それが知的好奇心です。「これも好き」がどんどん増えて、知識がどんどん幅広くなって、深みも出てくる。(5)客観的な目で語れる、それが教養なんです。

手塚治虫さんは、マンガ家になるためにトキワ荘にいた赤塚不二夫さんたちによくこう言っていたといいます。

「一流の映画をみろ、一流の音楽を聞け、一流の芝居を見ろ、一流の本を読め。そして、それから自分の世界を作れ」

マンガ家になるといっても、マンガの勉強をするだけが大事じゃないんだ、いろいろな一流のものに触れて、自分の感性を磨いていくことこそが大事だよ、と言っていたんです。これは言葉を換えれば、「好奇心をもって、豊かな心を磨け」ということなのです。

ぼくはきみたちぐらいの年齢のとき、「勉強」と「教養」につながりを見いだせませんでした。勉強は「やらされている」感じの強いもの、義務的な感じのもの。教養は自分の興味のあることに対して、自分の意思で自由に深めていけるもの。

大学に入学してから、(6)「勉強と教養は地続きのものだった」と気づきました。英単語をせっせと覚え、長文読解ができるようになっていると、知りたいことを英語の本で直接読めます。歴史を覚えていると、「この時代、西洋はどういう時代で、日本は何時代、世界はこんなふうにつながっていたんだ」と大局的な視点がもてます。数学でつちかった論理的な思考は、哲学的なものの考え方を理解するのにも役立ちます。

教養という果実が高い木の上にあるとすれば、そこまで届くようなはしごを作っていたのが勉強でした。教養という魚が知の海をたくさん泳いでいたとするなら、どうやったらその魚を獲ることができるか、その網を作っていたのが勉強でした。勉強をすることで、高いところにあるよく熟したおいしそうな果実も採れるようになる。大きな魚を獲ることもできる。勉強をしてきたことで、教養をより深めていけることを実感したのです。

「受験勉強なんてきらいだ」「自分のやりたいことなんて、そこにはない」と投げ出してしまわなくて本当によかった、と思いました。好きではないこともやるから、好きなことがいっそう楽しくなったのです。

「好きなこと」はどんどん増やし、深め、広げていくべきです。でも、「好きではないこと」も必ず好きなことにつながっているんです。いまはそれに気づけないでしょうが、いずれ気がつくときがきっと来ます。

（齋藤　孝　「本当の『頭のよさ』ってなんだろう？」）

問一　本文中の［A］～［C］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回使ってはいけません。

ア　あるいは　　イ　しかし　　ウ　なぜなら
エ　たとえば　　オ　ところで　　カ　だから

問二　＝＝線(a)「ひいきの」・(b)「太刀打ち」の意味として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

(a)「ひいきの」
ア　気にいっている
イ　期待している
ウ　楽しんでいる
エ　所属している
オ　気にしている

(b)「太刀打ち」
ア　堂々とふるまうこと
イ　集まって話し合うこと
ウ　立ち上がり名乗ること
エ　集中して取り組むこと
オ　張り合って立ち向かうこと

問三　――線(1)「『好きなこと』と『やらなければいけないこと＝勉強』の狭間で苦しむ」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　やりたいことがあるのに勉強しなければならないこと。
イ　友だちと話すことによってストレスを発散すること。
ウ　好きなことはあるけれども夢中にはなれないこと。
エ　勉強しなければ行きたい学校に行けないこと。
オ　好きなことをやるために勉強をすること。

問四　――線(2)「こんな感じの人を『採りたい』とは思ってくれません」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

①「こんな感じの人」とありますが、それはどのような人ですか。本文中から四十五文字以内でぬき出して、初めと終わりの五文字を答えなさい。（句読点などの記号も一文字に数えます。）

②どうして「採りたい」とは思ってくれないのですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　物事を続けることができないから。
イ　真面目に受験勉強をしていないから。
ウ　素っ気ない態度は社会では通用しないから。
エ　成功体験を積み重ねていない人は成長しないから。
オ　趣味や特技のない人とは話が合いそうにないから。

問五　――線(3)「没頭することの『幸せ』」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　子どものころは熱中し、一つのことをずっとやっていられるということ。
イ　物事を続けることで、充実感や達成感を味わい、自信が持てるということ。
ウ　勉強や部活動に夢中になることで、親や友達から応援してもらえるということ。
エ　苦手なランニングでもゾーンに入ることによって、タイムをのばせるということ。
オ　好きなことに熱中することで、プロとしてやっていくだけの力が身に付くということ。

問六　――線(4)「没頭体験としてこれから先の自分の生き方にあらわれます」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　達成感を味わうことで、自分で自分を認めることができるようになるということ。
イ　何かに夢中になって取り組むことでみがかれた人間性を評価され、仕事につくことができるということ。
ウ　ある物事でうまくいかなかったとしても、別の方面で新たな可能性を発見することができるということ。
エ　いろいろなことをやってみることは、あらゆる環境に対応する能力を身につけることにつながるということ。
オ　自分の可能性を信じることができるようになり、更に自分の好きなことに向き合っていけるようになるということ。

問七　本文中の［　　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　口をはさむ
イ　相づちを打つ
ウ　長い目で見る
エ　はずかしがらない
オ　食わずぎらいにならない

問八　――線(5)「客観的な目で語れる、それが教養なんです」とありますが、どのようにすることで「教養」は身に付きますか。次の文の［　　］にあてはまる言葉を本文中からぬき出して、Xは三文字、Yは五文字で答えなさい。

関心を広げ、知りたいことを追い求める［　X　］を大事にするのと同時に、良いと思うつながりを自分の中に増やすことで［　Y　］をみがいていくこと。

問九　――線(6)「勉強と教養は地続きのものだった」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　自分の興味あることだけではなく、苦手なことも続けることで教養を深め、受験勉強にも身が入るということ。

イ　英単語や歴史を勉強していると、哲学的なものの考え方を深めることにつながっていたということ。

ウ　苦痛でしかなかった勉強は、社会に出て仕事をするうえで役に立つものであったということ。

エ　義務的に感じていた受験勉強が、自分の興味を深めることにつながっていたということ。

オ　他人からやらされてやっているだけでは、教養を身に付けることはできないということ。

問十　生きていくうえでどのようにすることが大切だと筆者は考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1)転校生になる準備なら万端だった。だって葵はずっとあこがれていたのだ。みんなが待っている教室に、すっと現れて可憐に挨拶する転校生に。きっと萌ちゃんの存在が大きいからだと思う。半年前、三年生の二学期に転校してきた萌ちゃんは、まるでアニメの主人公だった。夏休み明け。暑さでだらけていた教室は、萌ちゃんが入ってきた瞬間、そよ風が吹いたみたいになった。

「くぬぎ台小学校から来た、(2)藤原萌です」

レースのえりがついた紺色のワンピースを着て、きれいな発音で自己紹介をして、はにかむように笑った萌ちゃん。まさにこれから、転校生の物語が始まるんじゃないかと葵はわくわくしてしまった。女子は押し黙ってしまったし、男子は間違いなくみんな［A］の下を伸ばしていたと思う。

きっと素敵な子なんだろうな。

葵はジーンズのひざをなでながら、萌ちゃんをじっと見つめた。

予想どおり萌ちゃんは素敵だった。いや、予想以上だった。勉強はもちろん、走るのもはやかったし、ピアノも弾けた。しかも性格はおしとやかで控え目。まさに、優等生のヒロイン、という言葉がぴったりの子だった。

一方の葵は勉強はいまいち、体育は嫌いじゃないけれど、よく転ぶ。

歌は好きだけれど音がはずれがち。忘れ物も多い。つまり少しどじなのだ。そのせいでクラスでは微妙に浮いた立場にいた。授業や学級会で発表するたびに、忍び笑いがおこったり、からかわれたりすることもある。この間なんか、女子たちが悪口を言っているのを偶然きいてしまった。

「葵ちゃん、掃除中また歌ってたね」

「ミュージカル風だよね」

ほうきを持つと歌いたくなるのは葵のくせだった。歌えば掃除が楽しくなってきて、体がどんどん動くのだ。けれども女子たちはそんな葵の真似をして、「こーんな感じ？」とくるっと回り、「ひくよね～」なんて笑い転げていた。

(3)お父さんの転勤の話をきいたとき葵は少しほっとした。そればかりか、断然元気がわいてきた。

新しい学校では、ちゃんとやろう。忘れ物もしないし、勉強だって頑張る。もちろん掃除中には歌わない。そして萌ちゃんみたいなヒロインキャラになるんだ。

葵には自信があった。なにしろこの半年間、萌ちゃんのことをじっくり観察していたのだ。笑い方や話し方を。それだけじゃない。給食を食べるときは、必ずスープから飲むのも知っているし、発表するときは、左耳に髪をかけることにも気がついている。

あんな風にやれば、正真正銘のヒロインになれるに違いない。

お兄さんとおじさんの間くらいの先生の後ろについて、葵は教室に入った。付き添いのお母さんは廊下から様子を見ていた。

新しいワンピースは転校することが決まって買ってもらったものだ。

(4)「あら、いつもと感じが違うわね。本当にそれでいいの？」

すそに花のししゅうが入った若草色のワンピースを選んだのを見て、お母さんは不思議そうだったけど、葵は大きくうなずいた。

「いいの」

あたらしい私になるんだ。

葵は先生に並んで教壇に立った。知らない人の視線が集まってみぞおちのあたりがきゅっと固くなった。のど元にどきどきがせりあがってきて、みんなの顔がぼんやり見えた。

「すずかけ小学校から来た、松岡葵です」

けれども葵はおしとやかな笑顔を作って言った。鏡の前で何度も練習したように、うっすらと目を細めて口のはしを少しあげた。

「では席はそこに座ってください」

先生に言われてついた席の隣には、髪の長い女子が座っていた。

「よろしくお願いします」

作り笑顔のまま言うと、女子は無表情な顔でちょっとだけこくりと頭を動かした。そして机の上に置いてあったノートを葵のほうに滑らせた。

(5)〝早坂七海〟と書いてある。自己紹介のつもりらしかった。

周りに座っている人たちがちらちらと自分を見ているのがわかった。

転校生がどんな子なのか気にしているのだ。葵は［　　］。

優等生らしくしなくっちゃ。

休み時間になると、萌ちゃんがそうされていたように葵の周りにも人が集まってきた。いくつか質問をされたので、葵はその間ずっと微笑んだまま、萌ちゃんみたいなきれいな言葉遣いで答えた。なんだか自分が本当に萌ちゃんになったみたいな気分だった。

帰りは近所に住んでいる二人が一緒に帰ってくれることになった。紗季ちゃんと真由ちゃん。よく似た感じの女の子だ。二人とも家は、学校と葵の家の途中にあるマンションだった。

「明日から一緒に学校に行こうね」

別れ際に二人が誘ってくれた。本当はとっても嬉しくて、とび上がりたいくらいだったけど、(6)葵はぐっとこらえた。そして素早く考えをめぐらした。

こんなとき、萌ちゃんだったらなんて言うかな。

頭の中は空っぽだ。一緒に帰ったことがないからわからない。

「うん、あ、あの……」

「じゃあね、バイバーイ」

へどもどしているうちに、二人は自分たちのマンションに入って行ってしまった。

「あー疲れた」

家に帰ったとたん、葵はリビングのソファに倒れこんだ。よほど緊張していたのだろう。体がかくかくとおかしな音をたてていた。

「おかえり。あれから学校どうだった？」

「……ふつう」

先に帰っていたお母さんの質問にも答えられないほどぐったりだ。新しい学校であったことが、遠い昔のことのようにかすんでいた。それどころかほんの今まで一緒だった子の顔すら思い出せない。

どっちがどっちだったかな。

考えている間に、うねりのような眠気が襲ってきた。

三日がたった。葵はますます頑張っていた。常に萌ちゃんを思い浮かべて、つとめておしとやかにふるまった。授業中は自分からは発表をしなかったが、数度当てられたときは、右か左か確かめてから耳に髪をかきあげたし、給食のときは、まずスープ。間違えそうになったときはやり直した。特に気をつけたのは掃除のときだ。つい癖で何度も歌をうたいそうになってしまうのを必死で抑えた。

あたらしい私、あたらしい私。

おかげで前みたいに笑われることはなかったけれど、ひとつ困ったこともあった。(7)萌ちゃんのことばかり考えているせいか、肝心のクラスメートの顔と名前が、なかなか覚えられないのだ。そればかりか、教室全体がまるでフィルターでもかかっているみたいに白っぽく見える。

そんなふうにして一週間がたった。その日、葵は朝起きるのが遅れてばたばたと飛び出した。二人のマンションには遅れずについたが、走ったせいか学校についても体がだるかった。

「疲れない？」

そう声をかけられたのは、中休みだ。顔を上げると隣の席の七海ちゃんと目が合った。席が隣同士とはいえあまり話したことがなかった。七海ちゃんは口数が少ない。

葵はあわてて背筋を伸ばした。

「え？」

話しかけられたことは意外だったけれど、それ以上に質問の内容に驚いてしまった。なぜそんなことをきかれたのか考える前に、するりと返事が飛び出した。

「疲れる。すごく」

ぽかんとした顔で言うと、七海ちゃんはやっぱりね、と言うように［B］をすくめた。

(8)「転校を機に変わろうとしてるからよ。無理してるから、ちょっと変」

図星をつかれて、葵は［C］を丸くした。

「どこが変？」

「発表するときとか、給食のときとかプチパニックになってる。一番ひどいのは掃除のとき。手足の動きがばらばらだよ」

「あんなに気をつけてたのに」

絶望的に言った葵に、七海ちゃんは声をひそめた。

「もしかして誰かの真似をしてない？」

「どうしてわかるの？」

まん丸にした目でたずねた葵に、七海ちゃんは顔をゆるめた。やわらかな笑顔だった。

「私もそうだったから。半年前転校してきたとき変わろうと思ったの。前の学校では無口なせいであんまり友達がいなかったからね。それで人気者だった活発な子を真似して笑ったりしゃべったりしてたら、舌をかんで大きな口内炎ができた。無理はするもんじゃないって思った」

(9)「はあ～」

葵は伸ばしていた背筋を椅子の背もたれに投げ出した。シュルシュルとなにかが体から抜けていく。きっと萌ちゃんのイメージだ。体の中いっぱいにふくらませていた萌ちゃんが、音をたてて出ていったのだ。

「大丈夫、まだ誰も気がついてないから」

七海ちゃんはいたずらっぽく笑った。(10)その言葉にあたりを見回した葵には、はじめて教室の中がはっきりと見えた気がした。

（まはら　三桃　「あたらしい私」）

問一　本文中の［A］～［C］にあてはまる言葉として最も適当なものを選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア　首　　イ　肩　　ウ　耳　　エ　口　　オ　手
カ　胸　　キ　鼻　　ク　足　　ケ　腹　　コ　目

問二　――線(1)「転校生になる準備なら万端だった」とありますが、それはどのようなことですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　どんな転校生になるか決めているということ。
イ　だれとでも仲良くできる性格であるということ。
ウ　お別れ会でのあいさつはすんでいるということ。
エ　散らかっていた部屋の片付けが終わったということ。
オ　新しく住む家の近所の人にあいさつをしたということ。

問三　――線(2)「藤原萌」・(5)「早坂七海」とありますが、この説明として最も適当なものを次の中から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

ア　明るく元気で間がぬけている。
イ　優しくおだやかで運動が苦手である。
ウ　物静かでなんでもそつなくこなせる。
エ　成績優秀で困っている人を助けてくれる。
オ　ぶっきらぼうで誰とも関わろうとしない。
カ　多くを語らないが周りをよく観察している。

問四　――線(3)「お父さんの転勤の話をきいたとき葵は少しほっとした」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　あこがれている萌ちゃんの真似を遠慮なくできるから。
イ　大好きな歌を思いっきり掃除中に歌うことができるから。
ウ　新しい学校の先生は失敗をしても許してくれそうだから。
エ　自分のくせや性格のせいで学校でうまくいっていないから。
オ　みんなからちやほやされている萌ちゃんに嫌気がさしたから。

問五　――線(4)「あら、いつもと感じが違うわね」とありますが、「いつも」はどのような感じですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　全身が黒色で近寄りにくい感じ。
イ　堅苦しくなくて動きやすい感じ。
ウ　ブランド品でそろえた高級な感じ。
エ　流行を取り入れた大人っぽい感じ。
オ　きちんとしていてだれからも好かれる感じ。

問六　本文中の［　　］にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　笑顔で手をふった
イ　周りの人に話しかけた
ウ　「静かに」と注意した
エ　そっとメガネをかけた
オ　すっと背筋を伸ばした

問七　――線(6)「葵はぐっとこらえた」とありますが、それはどうしてですか。次の中から最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。

ア　優等生のふるまい方として、新しい友達を作るときは笑顔で落ち着いて接する方が良いと考えたから。
イ　転校してすぐに仲の良い二人組に加わるのは不安で、うれしい気持ちをさとられないようにしたから。
ウ　緊張していたために、顔の区別がついていない二人の名前を間違えたらいけないと思いとどまったから。
エ　理想的な私を演じて転校初日からうまくいっていたのに、うれしさのあまり本来の自分の姿を出してしまいそうになったから。
オ　予想しなかったことが起きて喜んだが、まだ二人がどんな人かわからないので本当の気持ちは言わない方がよいと思ったから。

問八　――線(7)「萌ちゃんのことばかり考えている」とありますが、この様子を他の言葉で置き換えている部分を、――線よりも後ろから二十文字でぬき出して、答えなさい。

問九　――線(8)「転校を機に変わろうとしてるからよ」とありますが、どうしてこのように思ったのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　新しい環境の中では、だれもがみな新しく生まれ変われるものだから。

イ　葵の服装や言動が七海の友達の萌とそっくりで、真似をしているのが明らかであったから。

ウ　葵の話し方やしぐさが、七海が以前にあこがれていたアニメの主人公と似通っていたから。

エ　無口で友達の少ない七海とは違って、葵は新しい友達がすぐにできてうらやましかったから。

オ　七海が転校してきたときに無理して疲れ果ててしまったので、葵の様子が同じだとわかったから。

問十　――線(9)「はあ～」とありますが、このときの葵の気持ちとして最も適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア　絶望

イ　疑問

ウ　解放

エ　反抗

オ　感激

問十一　――線(10)「その言葉にあたりを見回した葵には、はじめて教室の中がはっきりと見えた気がした」とありますが、それはどうしてですか。わかりやすく説明しなさい。

受験番号	氏　　名

令和２年度　国語解答用紙

※12	※11	※10	※9	※8	※7	※6	※5	※4	※3	※2	※1

〔三〕

問一
A
B
C
問二
問三
(2)
(5)

問四
問五
問六
問七

問八
20

問九
問十

〔二〕

問一
A
B
C
問二
(a)
(b)
問三

問四
①
初め
終わり
②
問五

問六
問七
問八
X
Y
問九
問十

〔一〕

6	1
7	2
8	3
9	4
10	5

※欄は何も書かないこと

得点	※